

# 研修の特徴 小児科

## 大塚病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

### 新生児科

プログラム責任者：新生児科 大橋 祥子  
プログラム期間：3年

新生児専門医は健常新生児および病的新生児に対する診療を行い、助言を提供する新生児医療の専門医であり、その専門医にふさわしい知識と技能を習得することを本コースの目標とします。具体的には胎児・新生児の成長・発達の正常および異常な側面について生理学的・病理学的に高度な理解と知識を有すること、産科的・内科的・外科的妊娠合併症とそれらが母体・胎児・新生児に与える影響について十分な理解を有すること、合併症を有する新生児の診断と治療に対する最新の専門的知識と技能を有すること、ハイリスク新生児の長期予後に関する高度な知識と健康調査の技能を有すること、を目標とします。

研修期間は原則3年間で、多施設での研修も行います。3年間の研修で日本周産期新生児医学会・新生児専門医の受験資格が得られます。

## 墨東病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

### 新生児科

プログラム責任者：新生児科 九島 令子  
プログラム期間：3年

本プログラムは、区東部医療圏の総合周産期センターである都立墨東病院にて新生児医療の研修を行うためのプログラムにおける、サブスペシャリティ研修として実施されるものです。

当院は開設以来、区東部の周産期医療のうち新生児部門全体の役割を担っており、出生後の新生児の様々な課題、具体的には（超）早産、新生児仮死、種々の先天性疾患、その他出生後に異常を呈した児を診療しています。

当院の特徴としては、特に超早産児の救命率、および長期予後が全国的にみて良好な成績を納めてきている点であり、在胎24週未満で出生した児や、出生体重500g未満の児に対する診療に実績があります。また、周産期新生児専門医（新生児）の取得も目指します。

## 小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

### 小児血液 (新専門医制度)

プログラム責任者：血液・腫瘍科 湯坐 有希  
プログラム期間：3年

小児血液・腫瘍学をサブスペシャリティとして希望する、小児科専門医を既に取得している、または初年度に取得予定の研修生を対象とします。

血液専門医取得のために3年間の研修期間に必要な症例経験は、2年次までに十分経験できます。また臨床研究や橋渡し研究、症例発表を積極的に行うことで学術発表も達成可能と考えております。

また、小児血液学においては小児がんと呼ばれる悪性腫瘍の治療が重要ですが、当センターは小児がん拠点病院であり、臨床試験にも積極的に参加しており、十分な研修を積むことが可能です。

また、血友病診療連携地域中核病院であり、血友病をはじめとした出血性疾患の診療も豊富に経験できます。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## こどもの 病院総合診療医

プログラム責任者：総合診療科 榊原 裕史  
プログラム期間：3年

小児科専攻医 3年間を修了後、こどもの病院総合診療医になるために、以下の4項目ができることを目標とした3年間のコースです。

- ①小児科の一般的な疾患に留まらず、希少疾患、先天疾患の病態の的確な理解の上に、専門科（専門施設）との的確なタイミングで相談・議論ができるようになる。
  - ②患者だけでなく、シニアレジデントやコメディカルに対して効果的なフィードバックを行う。
  - ③臨床研究を通して医療の質を正しく評価し、得られた知見を臨床に適応する。
  - ④さまざまな部門からなる医療チームの中心となり、病院機能全体を統合し、医療水準の向上を目指す専門性を身につける。
- 目標を達成するために、総合診療科の研修とともに、院内各科や外部施設（計6か月未満）での研修も行います。

## 小児感染症

プログラム責任者：感染症科 堀越 裕歩  
プログラム期間：3年

小児専門病院にて、幅広い分野での感染症診療が経験できます。コンサルテーションを通して、感染症に特化した集中型研修を行えます。

当院は日本小児感染症学会、日本感染症学会の専門医の認定研修施設、環境感染症学会の教育施設でもあり、感染対策、抗微生物薬の適正使用プログラム、微生物検査などの病院の質管理も経験できます。

将来、自立して小児感染症全般のマネジメントができるようになるのが目標です。研究では、計画立案から実施をして、成果は全国学会、国際学会や学術誌に和文、英文で発表します。教育も力をいれており、国内での小児感染症教育でリーダーシップを期待され、講師なども務めます。

院内で経験の少ない分野は、院外研修で補完します。本プログラムでは、国内外で活躍する小児感染症分野の次世代リーダーを育成します。

## 小児アレルギー

プログラム責任者：アレルギー科 吉田 幸一  
プログラム期間：3年

小児科専門医（および取得見込み）を対象とし、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどアレルギー疾患の重症例および多種合併例を多職種で連携して診療することを経験します。さらに、消化管アレルギー、食物依存性運動誘発アナフィラキシー、慢性蕁麻疹、薬剤アレルギー、ラテックスアレルギーなどより専門的な知識を要する疾患の診療も学びます。

また当院は東京都のアレルギー疾患医療拠点病院に指定され、地域の医療連携とともに教育・保育施設のスタッフを対象としたアレルギー教室の講師を経験します。

豊富な症例経験と充実した研究支援体制を活用し学会発表や論文の執筆活動なども積極的に行っていただきます。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児循環器

プログラム責任者：循環器科 前田 潤  
プログラム期間：3年

3年間の研修を通して、小児循環器学の専門的な知識・技術を学び、独力で診療を行う能力を身につけます。胎児期から成人期まで、先天性および後天性心疾患について、外来・入院患者の診療、検査の実施・解析、薬物やカテーテルによる治療などに携わります。

患者・家族とのコミュニケーション、関連するスタッフとのチーム医療も円滑に行えるようにします。シニアレジデントの教育、学会発表や論文執筆などの研究にも積極的に関与します。

研修終了後に小児循環器専門医レベルまで到達することが大きな目標です。今までの経歴によっては、受験資格のために数年の研修の追加が必要になりますが、当院での研修によって主な要件を満たすようにします。

## 小児内分泌・代謝

プログラム責任者：内分泌・代謝科 石井 智弘  
プログラム期間：3年

3年間の研修で、①疾患・病態の的確な理解、②臨床研究・論文投稿の実施、③指導者資質の涵養を具体的目標とします。

1年目は基盤的診療能力の確立に重点を置きます。低身長・思春期早発・肥満など頻度の高い疾患の初期対応、新生児マススクリーニング陽性者の初期対応、1型糖尿病発症時の急性期管理とフォローなどを習得します。専門学会での発表を通じて、症例提示・討論の基礎的能力を養います。

2～3年目は、高度専門診療・研究・教育の三領域に取り組みます。臨床面では専門性の高い疾患の長期管理を担い、遺伝カウンセリングの実践と医療制度・医療経済への理解を深めます。

研究面では臨床研究を自ら立案・遂行し、その成果を国際専門誌へ英文論文として投稿します。後輩や非専門医への教育を担うことで、研修の集大成として指導者としての素養を身につけます。

## 小児腎臓病

プログラム責任者：腎臓・リウマチ膠原病科 濱田 陸（幡谷 浩史）  
プログラム期間：3年

小児科専門医取得後に、腎疾患全般の病態の理解とそれに基づく診療が行えること、臨床研究を遂行する能力を習得することを目標とした3年間のコースです。

診療に関しては、当院が全国でも有数の臨床経験を有していることを活かし、一般的な管理に加え高度で専門的な診療技術の習得を目標とします。特に①乳幼児の慢性腎臓病から透析、腎移植までの管理、②難治性ネフローゼ症候群の免疫抑制薬治療、③成人科への移行期医療、④他科と連携した重症患者の管理（血液・腫瘍患者の腎合併症、神経免疫疾患に対する血漿交換療法、集中治療室で急性腎障害管理）に重点を置いています。

臨床研究は、当科が行っている種々の臨床研究（特定臨床研究や国際共同治験を含む）に携わり、新たな研究の立案、遂行から発表、論文作成までを目標とします。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児リウマチ膠原病

プログラム責任者：腎臓・リウマチ膠原病科 赤峰 敬治（幡谷 浩史）  
プログラム期間：3年

小児リウマチ・膠原病疾患全般にわたる疾病理解とそれに基づく患者個々への適切な診療が行える能力を習得することを目標とした3年間のコースです。

米國小児リウマチ研修課程を修了した指導医が、不明熱・関節炎の初期対応から、各疾患の一般的な管理に加えて、高度で専門的な診療技術の習得を目標として指導します。対象疾患は主に以下の疾患となります。

①若年性特発性関節炎、②全身性エリテマトーデス、③若年性皮膚筋炎、④シェーグレン症候群、⑤強皮症、⑥非細菌性骨髓炎、⑦血管炎症候群、⑧遺伝性自己炎症性疾患

また、隣接する多摩総合医療センターのリウマチ膠原病内科と連携して、カンファレンスや勉強会を通じて指導を行うことで、成人リウマチ性疾患知識の習得、移行医技術の習得、日本リウマチ学会専門医の取得を目指します。

## 小児神経内科

プログラム責任者：小児神経内科 今井 憲  
プログラム期間：3年

1. 小児神経疾患をもつ患者や、日常生活・社会生活において援助を必要とする患者とその家族に対し、思いやりを持って真摯に接する態度を身につけます。
2. 日本小児神経学会専門医委員会が定める「小児神経専門医のための到達目標・研修項目」を達成します。
3. ①急性期小児神経疾患 ②集中治療室に入室する重症小児神経疾患 ③他領域の小児内科疾患に合併する小児神経疾患の以上3領域は、当院において特に患者数が多く診療する機会が多い領域です。上記疾患を経験し、適切な判断・治療方針の決定ができるようになります。
4. 指導のもと、小児神経疾患に関する臨床研究や学会・論文発表を行い、自ら研究テーマを探究する態度を身につけます。

## 小児呼吸器

プログラム責任者：呼吸器科 石立 誠人  
プログラム期間：3年

小児呼吸器にまつわる全疾患が対象となります。代表的な疾患としては、乳児の喘鳴、長引く咳嗽、睡眠時無呼吸症候群、間質性肺疾患、気道や肺にまつわる先天奇形、先天性嚢胞性肺疾患、肺結核、コッホ現象などがあります。

また、習得すべきスキルとして、胸部X線、上気道X線の読影、胸部CTの読影、喉頭内視鏡検査、気管支内視鏡検査、気管支肺胞洗浄検査などの技術習得が求められます。

臨床知識や技術を学ぶだけでなく、学会発表や論文執筆を通して、最先端の知見を世界に発信していくことを目標とします。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児消化器科 (腹部超音波・内視鏡)

プログラム責任者：消化器科 細井 賢二  
プログラム期間：3年

当科は小児消化器を専門としており、小児の内視鏡検査・処置や腹部超音波検査を得意とする診療科です。便秘症などの **common disease** から炎症性腸疾患や胆汁うっ滞性肝疾患などの希少疾患まで経験できます。当科研修コースでは基本目標として以下の3項目を掲げます。

- 1) 急性腹症や慢性消化器疾患、肝胆膵疾患の鑑別疾患を挙げ、診断・治療を行う。
- 2) 腹部超音波検査（超音波下腸重積整復を含む）や消化管内視鏡検査・処置（消化管異物除去、止血術）を習得し1人で実施する。
- 3) 日本小児栄養消化器肝臓学会認定医と炎症性腸疾患学会専門医を取得する。  
他院では経験できない多くの消化器症例を経験しながら研修を行うことができ、小児科領域では習得者の数が少ない内視鏡や超音波などの臨床能力を獲得することができます。

## 小児外科

プログラム責任者：外科 富田 紘史  
プログラム期間：2年

外科専門研修を修了し、外科専門医を取得した、もしくは取得見込みの方が対象で、外科専門医の2階に位置付けられている小児外科専門医を目指すプログラムです。

当院は日本トップレベルの小児外科手術件数を誇っています。小児病院というと高度に専門的で特殊な患者さんが多い印象を持たれると思います。実際そのような患者さんもいらっしゃいますが、当院はカバー人口が多く救急医療に力を入れているため、**Common disease**や典型的な症例も非常に多く、小児外科の世界を隅々まで経験することが可能です。専門医・指導医を目指すには学術的な業績も必要ですが、nが多いという強みを存分に活かすことが可能です。

自分の能力と時間をうまく配分することで、希望の分野での経験を重点的に積むことができます。

## 小児整形外科

プログラム責任者：小児整形外科 太田 憲和  
プログラム期間：2年

1. 小児整形外科のコアになる疾患の対応を習得するため、以下の内訳で合計 60 例以上を経験し、その治療および管理が行えるようになることを目標とします。
  - ①上腕骨顆上骨折：10名以上
  - ②上腕骨外顆骨折：5名以上
  - ③前腕骨骨折：10名以上
  - ④下肢骨骨折：5名以上
  - ⑤発育性股関節形成不全：10名以上
  - ⑥筋性斜頸：5名以上
  - ⑦O脚、X脚：5名以上
  - ⑧足部変形：5名以上
  - ⑨四肢の先天性疾患：5名以上
2. 学術的研究および発表  
学会発表を年2回以上行います。  
2年間で1計画以上、臨床研究を主体となって行います。  
(学会発表、臨床研究等のタイトルは、受け持った症例を参考に決定します。)

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児脳神経外科

プログラム責任者：脳神経外科 井原 哲  
プログラム期間：2年

### 【コース目標】

脳神経外科専門医取得（見込み）者を対象に、小児神経外科認定医に必要な知識・技能を習得します。

### 【研修計画の概要】

研修を通じて、小児脳神経外科医として独立して診療できる能力を養成します。具体的には、小児脳神経外科領域の全疾患の診断・治療計画を立てられ、術前・術後の全身管理ができ、基本術式を実施でき、応用術式の助手を実施できることを目標とします。また、神経内視鏡手術を経験し、神経内視鏡技術認定医を取得します。小児医療で重要なチーム医療に精通し、研修医教育にも積極的に関わることが望まれます。

### 【研修目標】

基本術式の術者：50件以上

応用術式の助手：50件以上

学会発表 年間6件（全国学会3、地方学会2、国際学会1）以上

論文発表 年間1本

## 小児麻酔

プログラム責任者：麻酔科 西部 伸一  
プログラム期間：2年

当院は小児の総合医療センターであり、産科麻酔以外のすべての領域の麻酔管理を経験できます。産科手術をはじめとした成人麻酔は、関連研修施設である慶應義塾大学病院および東京医師アカデミー病院群で研修を行います。日本麻酔科学会専門医のほか、小児麻酔学会認定医、心臓血管麻酔専門医、区域麻酔学会認定医資格を取得できるよう、それぞれに必要な症例数および学術業績を獲得します。

- (1) 1年次は当院において、小児麻酔の基礎を学んだのち、新生児麻酔、先天性心疾患の麻酔、気管手術の麻酔などを担当します。
- (2) 2年次は希望に応じて、関連施設で集中治療、緩和医療、ペインクリニック、成人心臓麻酔、産科麻酔を研修します。日本麻酔科学会専門医資格を取得した後は、臨床指導医としての資質を磨きます。

## 小児集中治療

プログラム責任者：集中治療科 齊藤 修  
プログラム期間：3年

小児集中治療の実践には、こどもとその家族を中心に据えた高い倫理観が問われます。本コースでは急性期のこどもに人工呼吸器やECMOといった高度医療を適応させる知識・技量の獲得に加えて、将来にわたる予後を加味した高い知見を培っていただきます。

また在宅医療を必要とする医療的ケア児、障害を負ったこどもなどに対してもその家族を含め、常に「より良い医療」とは何かを問い続ける姿勢も必要です。換言すれば、死の差し迫る超急性期にこそ問われる質の高いエビデンスをもった高度医療の実践と、俯瞰的にこどもと家族を見守る崇高な倫理観の滋養によって、真の小児集中治療医を育むことを目的としたコースとなります。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児救急医学

プログラム責任者：救命救急科 萩原 佑亮  
プログラム期間：3年

小児科医としての視点を持ちながら、救急医として救急医療を実践することで、社会のセーフティネットとなるPediatric Emergency Medicineを専門とする医師を育成します。

救急外来を受診する小児患者の緊急度および重症度の判定を行い、すべての児に対して救命のための処置を含む適切な初期診療ができるようになること（専門分野に細分化された医療ではなく、外科系を含む多くの専門分野をひとりでカバーする横断的医療）、また、救急外来という資源や時間が限られた環境において、目の前の患者に加えて救急外来全体の安全を担保した診療マネジメントができるようになること（時間的・空間的マネジメント）を目指す研修です。

また、救急医療は社会とのつながりが強い領域であるため、アウトリーチを実践できる知識と技能を習得します。

## 新生児科

プログラム責任者：新生児科 岡崎 薫  
プログラム期間：3年

### 【研修の特色】

- ・実践豊富な優れた臨床医の育成を目的とした包括的なプログラムです。
- ・新生児科および小児専門である全診療科の優れたスタッフの指導の下、新生児医療を幅広く学ぶことができます。
- ・重症新生児の治療や新生児搬送を1人で対応できるようになります。

### 【研修計画】

研修期間は3年間。周産期専門医の取得。希望によりプログラムの2年目後半6か月に専門診療科や研究機関、在宅施設等での研修が可能です。

【施設】NICU 24床・GCU48床、入院数約700名/年。新生児専用救急車による新生児搬送(約300件/年)。低体温療法、一酸化窒素吸入療法、低酸素療法、交換輸血、胸腔穿刺、気管支ファイバー、内視鏡等。主な対象疾患は極低出生体重児(約100名/年)、新生児仮死、循環器疾患、外科疾患等。

## 臨床試験科

プログラム責任者：臨床研究支援センター 森川 和彦  
プログラム期間：3年

臨床研究や治験、医薬品・医療機器の開発に関する研修では、設計から遂行、解析、発表、論文作成まで全プロセスを一貫して行い、これらの臨床研究の実務能力を身につけることが目標です。

本部・研究推進センターと連携し、東京都立病院機構全病院の研究を支援することで、小児以外の様々な分野の研究も経験できます。当科の研修では直接患者を担当せず、他科との併修も可能（該当科責任者の了承要）です。生物統計などの必要な知識を得るために院外の講義や研修を受講することもできます。臨床研究コーディネーター（CRC）、データマネージャー（DM）、生物統計家や、患者・家族や医療スタッフとの連携を学びます。倫理指針や法規に則った研究体制の整備、関連委員会運営にも携わります。

本プログラムでは、臨床研究の専門家としてリーダーを育成します。

# 研修の特徴 小児科

小児総合医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 臨床遺伝科

プログラム責任者：臨床遺伝科 吉橋 博史  
プログラム期間：3年

外来診療（約 3,500 件/年）、初診（約 500 件/年）、病棟依頼（約 300 件）の豊富な症例数を通じ、小児難病、がんゲノム医療、周産期遺伝医療、移行期医療を体系的に学びます。その人らしい自律的な意思決定を支援し臨床ゲノム医療を担う人材の育成を目指します。

### <研修計画の概要>

1. 先天異常症候群：形態異常診断学に基づく診断の知識とスキルの習得
2. 遺伝学的検査：適応、解析原理、検出限界、結果解釈の説明
3. ゲノム医療：様々な専門診療科と連携したゲノム医療の実践
4. 遺伝カウンセリング：認定遺伝カウンセラーと協働したクライアントの意思決定支援
5. 先天異常症候群のトータルケア：胎児期から成人期までの様々な移行医療支援
6. 遺伝医療の啓発と普及：教育・学術活動を通じた遺伝医療への貢献

多摩北部医療センターで研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児内分泌・糖尿病

プログラム責任者：内分泌・代謝内科 櫻田 摩耶  
プログラム期間：3年

## 小児神経内科

プログラム責任者：小児科 大澤 由記子  
プログラム期間：5年

積極的に専門医の育成を行っています。  
希望のある方は、ぜひご相談ください。

### <サブスペシャリティ領域専門医研修施設認定>

- ・日本内分泌学会認定教育施設
  - ・日本小児神経学会小児神経専門医研修認定施設
- それぞれ常勤の専門医が指導医として在籍

### <ほか常勤の専門医・指導医>

日本小児循環器学会小児循環器専門医・指導医  
日本アレルギー学会アレルギー専門医（小児科）

### <その他の領域研修>

児童精神科領域・子どものこころ専門医領域として精神・神経科専門施設である多摩あおば病院との施設連携あり

# 研修の特徴 小児科

神経病院で研修可能なサブスペシャリティ領域

## 小児神経

プログラム責任者：神経小児科 福田 光成  
プログラム期間：2年

当科には、小児神経学全般はもちろん、不随意運動、てんかん、神経・筋疾患学などを指導できる専門医が揃っています。院内の脳神経内科、脳神経外科や神経精神科との連携も緊密で、検査部門(神経放射線、神経生理、神経病理)も充実しています。

また、隣接する都立小児総合医療センターの総合診療科や神経内科とも強く連携しています。このため、外科治療を含む不随意運動ならびにてんかんの診療、神経免疫疾患、代謝・変性疾患、神経・筋疾患、脳炎・脳症を含む神経救急など、小児神経学を幅広く、かつ深く学ぶことができます。院内のカンファレンスや勉強会は大変充実し、学会発表も盛んです。小児科一般を学ばれた先生方が小児神経の研鑽を積むために最適なプログラムをご用意して、お待ちしております。